

団体名：劇団千年王國

事業名：東京国際舞台芸術フェスティバル・リージョナル・シアター・シリーズ公演

文章作成：劇団千年王國 制作 井神拓也

はじめに

東京国際芸術祭 2005「リージョナルシアター・シリーズ」は、地域の公共ホールを主たる活動拠点として地域の芸術文化活動に貢献している地域劇団を東京国際芸術祭のなかで紹介し、地域の芸術文化情報の全国への発信を促進し、かつ地域の芸術文化環境の活性化を図ろうとの趣旨により、財団法人地域創造の事業として、99年に始まり、今回が6回目となった。前年度同様、特定非営利法人アートネットワーク・ジャパン（東京国際芸術祭主催団体）との共催により開催された。

出場団体は各地域の公共ホール等からその地域を活動拠点とし、地域の芸術文化活動に貢献している劇団について地方公共団体及び公共ホール等を運営している財団から推薦していただき、財団法人地域創造及びNPO法人アートネットワーク・ジャパンが選定を行い、全国各地14団体の中から4団体が選定された。

劇団千年王國は財団法人札幌市芸術文化振興財団からの推薦を受け、名古屋「劇団人工子宮」松山「劇団無限蒸気社」京都「トリコAプロデュース」とともに公演を行った。



【名称】東京国際芸術祭 2005 リージョナルシアター・シリーズ

【会期】2005年3月2日～20日

【会場】東京芸術劇場小ホール1

【主催】財団法人地域創造、NPO法人アートネットワーク・ジャパン、劇団無限蒸気社、劇団人工子宮、トリコ・A プロデュース、劇団千年王國、大阪市立芸術創造館

【共催】東京都

【助成】財団法人全国市町村振興協会

【協賛】アサヒビール社、株式会社資生堂、トヨタ自動車株式会社、松下電器株式会社

【公演データ】

2005年3月12日（土）14：00 / 19：00、3月13日（日）14：00 観客動員数：324名（シリーズ5演目中、最高動員）

【アンケートより】

- ・主人公の女性が過去にさかのぼっていく旅、とても幻想的でした。過去にさかのぼっていく過程でラジオの音声を使って時代を表現していたのも良かったと思います。
- ・俳優の皆さんの演技もさることながら、脚本にとっても魅かれました。
- ・BGM、音響効果、照明、ダンスが面白かったです。
- ・時間と空間が正方形の舞台と照明で変化するのが驚きでした。椅子の移動も1つのショーとなっていたと思います。
- ・躍動感あふれる演出で、シンプルな舞台装置の上で自分の中に景色がふくらんであっという間の2時間でした。
- ・泣けてしまいました。人の人生、自分の人生。ちょっと考えてしまいました。
- ・まだぜひ、拝見したいです。東京公演、これからもたくさん行ってください！

リージョナルシアターシリーズ 観劇日記

尾上そら（フリーライター）

追憶の線路の先にあるもの - 劇団千年王國『SL』 -

記憶を遡り、ルーツを探す旅に出る。物語の常套手段のひとつだ。事前に『SL』の概要を知ったとき、無意識に頭の中で作品を“常套手段”にカテゴライズし、油断して舞台に臨んでいたと思う。作・演出の橋口幸絵は、その「油断」に気持ち良いほど痛烈な一撃を食らわせてくれた。巨大な動輪を背負うだけの、フラットな黒いステージから生まれる物語は、それほど力強くかつ繊細だったのだ。俳優たちが現れ、リズムカルな彼らの動きと赤い本のひもが、行く先の知れぬ無限に続く線路を表す。続いて持ち込まれた8つの椅子が置き場所を定めたとき、そこはSLの車内になった。

その日を最後に廃線になる天北線。乗り込む人々、それを迎える車掌と年配の女性乗務員、蒸気機関車最後の勇姿を見ようと駅舎ではお祭り騒

ぎをしている。乗客の一人、赤いマントに身を包んだ女・小鳥は、喧騒に戸惑い苦々しい表情。だがSL最後の旅が、実は彼女の、いや彼女の父や祖父たちの生涯を遡って行くものだ気づいたとき、その表情は驚きと切なさに彩られる。しかもその旅は、車掌＝蒸気機関車自身の誕生の瞬間、希望に溢れた近代日本の始まりにまで線路を過去へ過去へと延ばして行く。

父母の出会い、結婚、生活からの逃避、戦争、汽車の座席に刻まれたメッセージ、移り行く時代、変わる心と変わらぬ思い、そして愛する人の死。シーンは冒頭のようにダンスで繋がれ、その躍動感が汽車の旅のうねりに重なる。観客の想像力を信頼したダイナミックな演出に、父を慕う想いや夫を支え子供を守る妻や母の強さを繊細に描き出す女性ならではの感性が伽わりたっぷりとした厚みのある劇世界が展開されていた。橋口が同じ『SL』のタイトルで処女作を書いたのは、何と15歳だという。今回は数えて3回目の再演。だが、初演当時の台詞はひとつも残っていない。それを“再演”と呼ぶかはさておき、題材へのこだわりとかけられた時間を考えるに、この作品を創り続ける事が表現者・橋口自身の、ルーツを探る旅なのかも知れない。

終幕。追憶の旅を終えた蒸気機関車は公園に眠り、その前に佇む小鳥は新たな命を生み出す意を決する。雪とも花とも見える薄片の降りしきる中その姿は、一時の休息の後、新たな旅が必ず始まる事を予感させてくれた。(2005年3月12日)